

新刻小學修身書

櫻老如藤熙編  
初等科之部  
卷四

東 京 圖 書 館				
			八 十 三	新 書 門
冊	號	架	函	類

K/10,1
23
4

櫻老加藤熙編

新刻小學修身書

版權所有 時習堂藏

新刻小學修身書卷之四

櫻老加藤熙 編

第一 恭敬

○今の孝ハ是能く養ふを謂ふ。犬馬に至ても皆能く養ふ有り。敬せざんハ何を以て別たんや。温公家範

○子婦私貨あり。私富あり。私器あり。敢て私假せざ。敢て私與せざ。鄭氏家範

○學者は患ふる所の最も是情ると輕  
しきとあり。情たれば則ち自ら治むる  
と廢し。輕けきば則ち物欲あり。只一敬  
字以て之を治むべし。居業錄

○真ふ能く敬を主とせれば。自ら襟慮  
あり。思慮を屏げんと欲するもの。皆  
是敬に至らざるあり。同上

第二 誠實 厚德

○誠を以て人を感ずるもの。人も亦  
誠を以て應ず。讀書錄

○志向真ならずれば。便ち是忠信あら  
じ。人忠信あらざれば。則ち事實あり。同上

○貧乏あるものに遇ば。宜しく力不隨  
ふて賑ふべし。若し富貴を須て而して  
後行へば。恐らくは吾儕終不濟ふ期あ  
り。畜徳錄

○善を積で。而して報を天小望むもの  
い福あり。恩を施して。而して報を人よ  
求むるものも徳あり。同上

○薛簡肅公奎蜀を爲して。惠愛を以て。  
名を得たり。民は老嫗。其子の不孝を告  
くるものあり。子貧して養ふ能はざると  
訴ふ。公俸錢を取りて之を與へて曰く。  
此を用て生を爲して以て養へと。母子遂

小相慈孝あり。自警編

第三 孝悌

○其人と爲りや。孝悌ありて而して上  
を犯すこと好むものい鮮し。上を犯  
すことを好まざりて。而して亂を作さ  
ること好むものい未だ之を知らざるか  
り。論語

○蘇頌字は。子容。宣州安南人。嘗て婺

州小知たり。舟桐廬を過ぐ。江水暴漲して舟將小覆らんとす。頌母の舟中小在る。然以て哀號して水小赴て舟を挽く。忽ち自ら止り。危ふしや漸く岸小及ぶ。子容母を負ふて先づ登る。舟乃ち覆る。衆以為純孝の保全する所ありと。人生必讀書

○章氏二女ハ。歙縣人。母程氏小從ひ。山小登り藥を採る。母虎にため小攫まる。

二女號呼して席を撃つ。庖走りて母全きを得たり。唐比刺史劉贇之を嘉し。其戸役を蠲き。居る所比合陽郷を改めて孝女郷とあり。坦園三子紀訓

#### 第四 勸善

○善を好むハ天下小優あり。若志自ら己れが能を用て。人比善を聞くことを惡まハ。何を以てハ事功を成さん。讀書錄

○己を未だ善あらずして。人之を譽むも喜ぶ小足らば。己れ善あるに人之を毀るも怒るに足らば。同上

第五 言語

○言を出ださ。須らく思省まづ。則ち思ひ主とありて而して言客とある。自然小言少し。長者之言

○言多きはまば則ち道に背き。慾多ければ

ば則ち生を傷る。省心錄

○一言或は邦を喪ふ小至る。其少あるも此或は以て禍を招き。或は以て事成敗る。慎言

○知るまのい言ひば。言ふまのい知らず。其光を塞いで其門を閉づ。表氏世範

○喜小乗して而して多言まづ。つらば。氣流れて而して亦爲めに動くを覺ふ。

讀書錄

○韓魏公言を歐會と同トク兩府よ事  
ふ。歐性素と褊ゆ一て。會ハ則ち齟齬た  
り。事を議まると小厲聲相攻めて解  
くべあらざる小至る。公一切問ハズ。其  
氣定まるを俟て。徐ハ一言を以て之を  
可否ま。二公皆伏ま。自警編

第六 躬行 家制

○世間第一種敬まべきの人の。忠臣。孝  
子。世間第一種憐むべきの。寡婦。孤兒。か  
り。魏環溪庸言

○家人の睦トからざるも。其相責る所  
の之の相似トせばあり。苟も其相似た  
るもの故以て自ら責まば。則ち翕然と  
して睦ト。畜徳録

○子孫の飲食。幼者のハ必らば長者小後

れ。言語亦必らば倫あり。賓客小應對も  
る小雜ふるに。俚俗冗言を以て去るを  
得べ。鄭子家範

○一家此中。老幼男女。一個此規矩禮法  
あひまひ。眼前興旺ありと雖も。便ち是  
衰敗の景象あり。訓俗遺記程漢舒筆記

○家居い。雨露霜雪を凌ぐためあり。結  
構を好むべあらば。惟大小い。其分限小

よるべし。三省錄

第七 交際

○人此性行。短ある所ありと雖も必ら  
ば長ざる所あり。人と交遊するに。若未  
常小其短を見て而して其長を見ざれ  
ば。則ち時日も處を同ふま可らば若し  
常小其長を念ふて而して其短を顧み  
ざれば。終身之と交ると雖も可あり。心省



○能く人比實病を攻むるは至難あり。能く人の實攻を受くるは尤も難しと爲す。人能く我が實病を攻め我を能く人比實攻を受けば。朋友の義其は庶幾か。讀書録

○兄弟骨肉は變ふ處しては宜く從容とべし。宜く激烈あるべからず。朋友交

遊は失ふ遇ふては宜く剴切あるべく。宜く含糊あるべからず。願體集

○唐狄仁傑并州の法曹たる時。同僚鄭崇質。絶域に使者を遣はる。而して其母老且つ病む。仁傑曰く。彼れ母此の如し。豈之を以て萬里に行はらしむべけんや。朝堂に詣て之を代らんと請ふ。崇質始て遠行を免る。と成得たり。十七史蒙求

第八 忍耐 勤儉

○ 淡薄い。是士人禋身に要領あり。後生事を省らば。走て繁華の路小入り。去る如何ぞ長進する哉得ん。畜徳録

○ 錙銖を惜むい。纖嗇小似するも之を久ふまれば日小益す。毫毛を損するは損あきに似たる也。之を久ふまれば日小消す。同上

○ 王文正公。冲澹寡ふして能く身を奉まらること儉約あり。家人は服飾過ぐるを見る毎ふ。即ち瞑目して曰く。吾が門の素風一ふ此小至る。亟小減損せしむ。故ふ家人或は一衣に稍華ある所を。閨中小於て之を易へ。敢て公を以て見せしめば。自警編

第九 剛毅

○氣浮あるものい。其志確あらざれば。心分  
鹿あるものい。其造ること深あらざれば。外  
小誇るものい。其中日小陋し。陽明則言  
○善を見て。勇で爲ま能はざれば。惡を見て  
も。勇で去る能はざれば。終身學小從事  
まと雖も。以て諸を已れ小有まざるあし。  
居業録

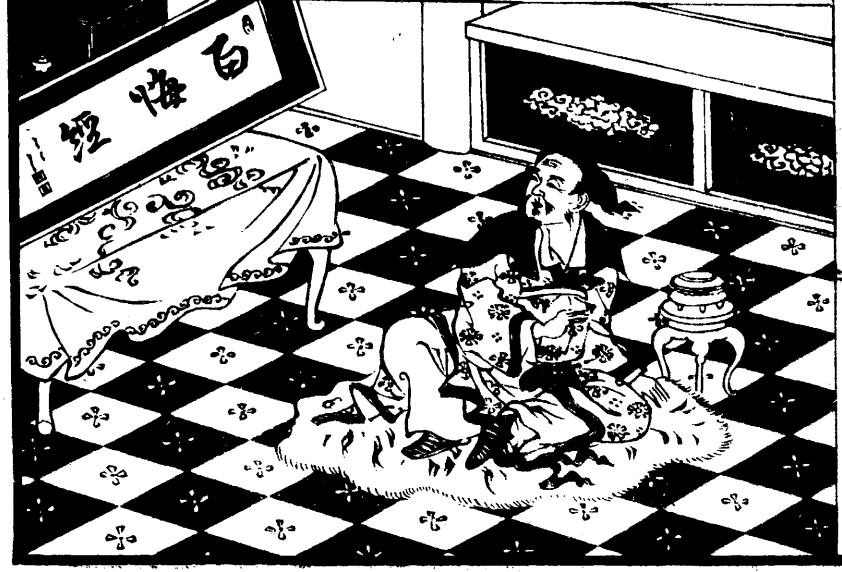
### 第十改過

○君子過ちあれば。則ち謝するに實を  
以てし。小人過ちあれば。謝するに文を  
以てし。博覽古言

○一念の非も即ち之を過めよ。一動此  
妄の即ち之を改めよ。讀書錄

○過ちを悔ゆるものい。過ちの起頭を  
尋ねんと要し。善に遷るものい。善の落  
着を尋ねんと要し。同上

○ 閩士刘乙嘗て酒  
 小醉ひ。人と妓を争  
 ふ。既小醒めて大小  
 慙ぢ。乃ち古今酒の  
 禍を受くるをのを  
 籍志以て自ら警め。  
 題して百悔經と曰  
 ひ。飲を絶すること



終身あり。二十一史

第十一 學問 立志

○ 周公の。上聖にして而して日小百篇  
 を讀む。仲尼の。天縱にして而して韋編  
 三び絶つ。博覽古言

○ 學を爲す第一の功夫は心を立つる  
 を本とあり。心存すると起る。則ち讀書。  
 窮理。躬行。踐履。皆此をより進む。讀書録

○人生氣質都て箇の好處有り。箇の好まざる所有り。學問の道他あり。只是の自家の好む所を培養し。自家に好まざる所を救正するに便ち了る。同上

○十章を讀み得て熟するに。一章を做し得て來る。如らば。一章を做し得て來らむ。那の幾章も亦將小湊り得て來らんとす。同上

○學者書を讀む能く用ふるに貴ぶ。若志書を讀んで而して用ふる能はざれば。則ち未だ嘗て讀まざると同ト。同上

○餘り有るを待て。而して後人を濟ふに。必らば人を濟ふの日あり。餘り有るを待て。而して後書を讀まむ。必らば書を讀むの時あり。願體集

○古人學に入り。一年早く經を離き。志

を弁するを知る。今人其身を終て而して自ら弁するを知らざるをのり哀むべきあり。畜徳録

○學志阿るものは更小氣質比美惡を論ぜず。只志如何を看る。匹夫も志を奪ふべからざるあり。惟學者は勇ふる能いざるは患ふ。讀書錄

○而今の如き利祿を貪て。而して道義

を貪らば。貴人と作らんと要して。好人とあるは要せず。皆是志立まざるは病ひあり。畜徳録

第十二 處事

○事を處する小人を喜ばむべからば。又人を怒らむ可らば。讀書錄

○事々放過せざべし。而して皆理小合

はんこと欲せば。則ち積むこと久ふ  
して。而して業廣し。同上

○事ハ。審ある所を貴ぶ。古人謂ふ。天下  
何事ハ。忙ふ因りて後ハ。錯了せざら  
ん。同上

○事々一定ハ。道理有り。須らく見得ま  
ること明ハ。養得まること熱して。應酬  
の際。方ハ。滯礙あらんと欲要まづし。

居業録

○雜事ハ。昏擾せらるゝものハ。心物ハ  
役せらるゝあり。苟も能く己れを立つ  
れば。事多しと雖も。常整ハ。亂れず。同上

第十三 處世

○人を愛し人を利する者ハ。天必らば  
之ハ。福也。人を惡み人を賤むをば。天  
必らば之ハ。禍也。私ハ。讐ハ。公ハ。及ばず。

省心錄

○人小して遠ま慮りたりけむは。必らば近き憂あり。論語

○凡る事皆當さに人小功を推し能を譲るべし。一毫も自ら徳し自ら能するの意あるべからば 畜徳録

○人我處する己まが意小任まべからば。人の情を悉きを要し。事を處する己

れが見小任まべからば。事乃理を悉く我要す。同上

○過を見おの福を求むる所以あり。己れり反するの禍を免るる所以あり。常小己れが過を見れば。常小吉中小向て行く。畜徳録

○彼の理是小。我れの理非あらば。我れ之を譲り。彼の理非小。我れの理是あら



バ。我れ之を容る。願體集

○樓護字ハ。君郷。故人呂公ハ子ありて而して貪し。食ハ護ハ就く。護の妻頗る之を厭ふ。護流涕して。妻ハ語て曰く。故人身を我れハ托す。義辭まづまあり。厭を生むる母也。習是編

第十四 警戒

○多欲あるものハ。人を畏るゝこと亦

多く。少欲あるものハ。人を畏るゝこと亦少し。欲せざる所あるものハ。恐れざる所あり。欲する所なきものハ。畏るゝ所あり。讀書錄

○人の論談ハ至てハ。但且つ之を聞き虚受悦服し。慎て鋒起し。勝を求むる勿也。祥究取捨ハ我れハ在るのこ。表氏家訓蒙書  
○言止ふし。而して疑はるゝ者ハ。養

ひ未だ厚うらぎるあり。行ひ貞くして而して侮を招くものい。信未だ厚うらぎるあり。同上

○人家子孫。湏らく忠義を殉ひ。廉恥を尚び。矻然として鶴比雞群を立つもの如きは要まづ。故家此風味を失ひざるべからず。同上

○夫れ常業おきまのい遊民あり豈惟

餓を免まざるらん。故僻邪侈至らざるたぐいて。而して刑戮之を随ふ。戒めざるべけん也。畜徳録

○事大小とある。皆湏らく智を用ひるべし。智い水の如きあり。流れざるべし。則ち腐き。同上

○鏡以て面を照らさ。智以て心を照らす。鏡明あれば則ち塵垢染めど。智明か

れば則ち邪惡呈せば。遵性寶訓

○小人ハ。固より當さ小遠ざくべし。然れども亦顯ハ小仇敵となんべし。然れども君子固より當さ小親むべし。然れども亦曲げて附和をあんべし。願體集

○貧賤の時。眼中富貴を着けざれば。他日志を得るも必らば驕らば。富貴の時。意中貧賤を忘るべし。一日退休するも怨

まず。同上

○失意此人小對して。得意の事を談ぶる勿き。得意の日小在て。失意の時を忘る勿き。同上

○徑路窄き處ハ。須らく一步を讓て。人小與へて行ふ。滋味濃的。須らく三分を留めて。與へて食ふ。同上

○學者ハ最も因循を怕る。直ち小須ら

12110,1

精神を拜擻さべし。昏鈍を要するこ  
と莫れ。火を救ひ病を治むる如く然  
り豈歲月を悠々さづけんや。讀書録

新刻 小學修身書卷之四

明治十七年九月廿九日版權願  
同年十月十三日版權免許發兌

福島縣士族

編輯人

加藤

熙

定價八割

東京府士族

出版人

松井方景

茨城縣平民

出版人

寺田新助

新治郡土浦仲城町六十八番地

新刻小學修身書

櫻老加藤熙編  
初等科之部

卷五

271  
P  
72

東 京 圖 書 館				
		八	十三	新書門
冊	號	架	函	類

K110.1  
23  
5